

防人が悲別の情を陳ぶる歌一首 并せて短歌

四四〇八番

大君の 任けのまにまに 島守に 我が立ち来れば はは
そ葉の 母の命は み裳の裾 摘み上げ搔き撫で ちちの
実の 父の命は たくづのの 白ひげの上ゆ 涙垂り 嘆
きのたばく 鹿子じもの ただひとりして 朝戸出の か
なしき我が子 あらたまの 年の緒長く 相見ずは 恋し
くあるべし 今日だにも 言問ひせむと 惜しみつつ 悲
しびませば 若草の 妻も子どもも をちこちに さはに
囲み居 春鳥の 声の吟ひ 白たへの 袖泣き濡らし
携はり 別れかてにと 引き留め 慕ひしものを 大君の
命 恐み 玉梓の 道に出で立ち 岡の岬 い廻むること
に 万度 顧みしつつ はろはろに 別れし来れば 思
ふぞら 安くもあらず 恋ふるぞら 苦しきものを うつ
せみの 世の人なれば たまきはる 命も知らず 海原
の 恐き道を 島伝ひ い漕ぎ渡りて あり巡り 我が
来るまでに 平けく 親はいまさね つつみなく 妻は
待たせと 住吉の 我が皇神に 弊奉り 祈り申して
難波津に 舟を浮けすゑ 八十梶貫き 水手整へて 朝開
き 我は漕ぎ出ぬと 家に告げこそ